

栃木県小山市
末柄牧場

末柄淳氏

【経営データ】

■個人データ／1964年生まれ。86年宇都宮大学農学部畜産学科卒業後、畜産団体に乳牛改良関係の仕事に従事。95年退職し家業につく。家族は妻と子供2人、それに両親の6人家族■経営概要／肉牛肥育（黒毛和牛）90頭、年間出荷50頭。水稲6.2ha、ビール麦11ha、ソバ11ha。■労働力／本人と父、農繁期に母と妻が助力する。



写真の背景に写るワラ梱包機は、母や妻でも扱いが容易なように、あえてふんわり梱包している。

スーパー読者の
経営力が選ぶ

あの商品この技術 23

畜舎は廃材利用、10年、20年使用はあたりまえの機械利用で徹底した償却費削減。それが利益を出す。しかし、1年分の麦代金を使って色彩選別機を導入するなど、必要と見れば思い切って投資をする。そんな末柄さんの機械施設を見た。



（写真上）10年前に中古で買ったヤンマーの汎用コンバインCA700。刈幅2m。麦およびソバに年間20ha以上を刈る。購入時にすでに1,000時間使っていた。買って10年。末柄さんも650時間以上使っているの、1,700時間近くは仕事をしている。さらに最近では面積も増え、麦・ソバで20ha以上、年間150時間は使う。220万円で買ったが、メンテナンスには400万円以上使っている。いろいろ不具合も出てきたようだが、これだけ使えば中古導入に成功していると言える。



（写真中）ビニールカーブで覆ったハウス内に格納されている自脱コンバインとトラクタ類。自脱コンバインは97年に入れたヤンマーCA475（4条）。9年ものだ。トラクタはすべて新車で購入したものだが、年季が入っている。写真のMF6120（79ps）の他、ヤンマーF395（39ps）とヤンマーFX22（22ps）の3台。79psはロータリ、5連のブラシラ、ペーラなど、39psではマニユアスプレッダ、ブームスプレー、水田ハロー、テッドレーキなどのほか、コンバイントレーラのけん引用。22psもブロードキャストやワラ梱包を集める時のトレーラとして使う。



（写真下）水稲育苗には、写真に写る4×14間ともう少し小さなハウスを使うが、田植え終了後にそのうちのひとつを厚手の銀色シートで覆い格納庫として使っている。4×14のハウスでシート代は約10万円。結構長持ちはしうと末柄さんの感想。

「うちを取材しても意味ないですよ。機械は皆、10年20年の年代もので、それもほとんどは中古購入」

そう言って笑う末柄淳さんは、父上の代に廃材を使って建てたという牛舎で90頭の黒毛和牛の肥育し、年間50頭を出荷する。耕種部門では、6・2haの水稲と麦・ソバでそれぞれ11ha。

食える経営者は償却費を押さえて（機械を長持ちさせて）利益を出しているのが常。日々変化する子牛と枝肉の価格、購入飼料の価格を眺めている畜産農家は概して経費管理の感覚に優れている。

小山市郊外といっても国道や住宅地域に近いこの場所で畜舎や倉庫を拡大するための土地を手に入れることは困難だ。60%という建ぺい率の点からもう増設は限界。昨年、堆肥舎兼作業場を400万円建てた。補助金を使えばもっと贅沢なものになったかもしれないが、建ぺい率の点から問題があったのだ。しかし、使い勝手を考えてあえて鉄骨で柱のない構造にした。400万円の償却



20年使っている1tのマニユアスプレッダ（タカキタ）。痛みやすい機械なのに良く使ったものだ



やはり中古で買った0.4mの機体中央で胴体屈曲するホイールローダ（TCM808）。狭い畜舎での作業に最適



3段マストのリフト（2.5t）。中古のTCMだが、4.3mまで上がる



軽トラ（4駆・ダンプ仕様）はダイハツを選んでいいる。その理由は前輪位置が座席下にあること。他社のものは前輪位置はもっと前だ。当然その方がホールベースが長くなり乗り心地も良くなる。でも、末柄さんは小回り性と運転席の足元が広くなることを選んだわけだ



乾燥機は40石×2基。一台は遠赤外線タイプ（山本）。乾燥機への張込と荷受は山本製作所の昇降機付きの荷受ホッパを選んでいいる。以前はパネコンを使っていた。しかし、末柄さんは黒化率80%でソバを収穫するが、パネコンだと茎葉などが詰まってしまうことがあり、昇降機に換えたという。ホッパには軽トラのダンプで投入している。

末柄さんは、乾燥機だけは中古を使わな



作業場を確保する目的も含めて、堆肥舎を鉄骨構造で建てた。中間に柱を作りたくなかったので鉄骨構造とした。そのために400万円かかった。



廃材を使った畜舎。細かな経費の節減が末柄さんの利益の元になる。中古機や年季ものの機械にはそんな知恵が込められている



い。機械屋さんの忠告でもあるそうだが、自身も火事を起こしたことがあり、中古の機械の場合、どうしてもメンテナンスの不安があるからだという。

（写真下）麦の出荷時に使う色彩選別機（山本）。1年分のビール麦の売上300万円を投じて購入した。汎用コンバインはソバ・麦で兼用するため、ビール麦として出荷する場合にソバの混入で品質に問題が出ることもあるからだ。品質基準を守れなければクズ麦。思い切った投資でも必要なものは仕方がない。でも、今年の麦は天候不順で収穫がままにならず、気をもむ日が続いている。

は25年。利益は出ていても資金繰りが厳しくなったのは誤算。中古で長期に使用する機械が多いが、メンテナンスには大きな費用をかけていいる。末柄さんも必要と思っただものは思い切って買う。麦のために導入した色彩選別機は1年分の麦代金を投入した。

費用計算への末柄さんの考えは、ワラの扱いにも示されている。6haの稲ワラはコンバイン作業時に結束して放出し、その後で家族総出で田に立てて乾燥する。稲ワラの汚れを防ぐためだ。しかも、その後には人手で結束紐を切り、圃場に散らす。さらにテッドレーキで披散・集草し、タイトベアラで梱包。梱包はふんわり軽い梱包にする（約15kg）。両親と奥さんを含め家族全員での人手による作業になるからだ。稲収穫は9月だがワラの収納が終わるのは年明けになる場合も多い。稲の収穫の後にソバの収穫と麦の播種が続く、その合間を縫っての作業となるためだ。ロールベールの体系であれば家族の労働負担を減らせることはわかっている。だが、収納スペースの問題でそれができないのが末柄さんの悩みのなのだ。でも、これで、買えば300万円分のワラが調達できるのだ。これも末柄さんの経営判断なのである。

（昆吉則）